ひと

「遺品整理屋は見た！」を書いた
吉田太一さん（42）

人は誰でも死ぬと必ず何かを残していく。でも本人は処分できない。4年間で約4千件の遺品整理を扱ってきた。

遺族が高齢で片付けられない。葬儀後、仕事に戻らなければいけない。誰も片付けに来ない、と大家からの依頼もある。9割が孤独死という。

遺体の発見が遅れたり、事件に巻き込まれたりした現場は悲惨だ。それでも「絶対に断らない」が信条。「依頼はSOS、断れるわけがない」

28歳の時に軽トラック1台で引っ越し屋を始めた。「何でもやります」を売り物にして遺品も引き受けるように。遺品の供養、消臭消毒、リサイクル、形見の配送。一業者で済む作業ではない。「全部頼んでもいいの？」と驚く客の言葉がきっかけで、02年に遺品整理専門の会社「キーパーズ」をアルバイトと2人で始めた。今は、社員20人に。

突然死した大学生の部屋を片付けていて、「着信あり」の携帯電話を見つけたことがあった。息子を心配する友だちがこんなにいた、と残された母親に伝わった。「遺品は人間が生きていた証し、人生そのもの」と思う。

孤独死の現場では「周囲がちょっと声を掛けるだけで違ったのでは」と無念さを感じることが多い。現実を伝えたくて書き始めたブログが、「遺品整理屋は見た！」（扶桑社）という本になった。

明日は我が身。私物はほとんど持たない。

文　中村真理子
写真　鈴木　好之